が、庄内一円から参加があり、山形市や秋田県からも受講しています。また女性も3～4割程度いますし、20代～60代まで幅広く参加しています。若い就農者はもとより、定年帰農という農業初心者、食や農に興味を持ち、ビジネスについて学びたいという人達です。中には通常では教える立場になる指導農業士や農業法人理事、和紙工房経営者、商社や大手企業を中途退職して帰郷した人など、実に多様な人たちが参加しています。

席を並べ、バスで同席し、販売実習では手伝ったり手伝われたりして、そしてビジネス計画書作成という山場を超えて、1年の長丁場を終わるころには年齢も前歴も目的も違う人たちが仲間意識（同級生意識）で結ばれています。

しかし、毎年の受講者数が定員40名（2017年度までは30名）を満たせていない状況です。

■農業スタートアップ塾

2017年度から農業スタートアップ塾の募集を始めました。これまでに2017年10月入塾者が1名、2020年4月入塾者が1名います（いずれも食と農のビジネス塾修了生）。学生向けの授業は基礎的でかつ科学的な内容であり、受講者は生物学や化学の基礎があまりないのについていけるのか、科目担当教員からは実践を重視する社会人にどの程度価値があるのかという心配の声がありました。しかし、受講者は疑問だった現象を科学的に説明されてすごく勉強になったと、科目担当教員からは課題に取り組む姿勢は真摯で、レポートは内容が充実していると、いずれも好意的な評価を頂いています。農繁期・農閑期関係なく15週連続で同じ曜日時間で行われるため、社会人が受講するのは難しい部分もありますが、農学部がそのままで農業者のスキルアップに価値があるといえるものです。

■農業体験

基盤教育科目となったことで、他学部の学生が受講するようになりました。全学生の約1割が農学部生ですが、受講生の過半数を占めています。他学部の学生にも農や食に関して興味を持ってもらういい機会と捉えることも出来ますが、受入農家の多くの方は出来れば農学部生を受け入れたいという要望をお持ちです。基幹科目という位置づけになっているため、履修登録が早い者勝ちのシステムで、ゆったりしている農学部生が履修できなかったというケースもありました。受講したい農学部生は全員受講でき、その上で他学部学生も受講できるような配慮が必要です。

■農学部学生・就農希望者と青年農業者の集い

庄内アグリユースのSNSグループの登録者は116名を数えます。数人の運営委員が事業を計画し、SNSで参加を呼びかけます。学生の参加がまだ少ない状況ですが、事情が許せば大学の教室や厚生会館などで事業を行うことで、学生と社会人が気軽に接することが出来るいい機会です。

表1　令和2年度 食と農のビジネス塾 カリキュラム

1	4月16日（木）9:30～10:30	開講式	
	11:00～12:30	オリエンテーション食と農のビジネスの意義と役割・研修の狙い	
	13:30～16:40（一般公開講座）	食と農のビジネス～今農業者が目指すもの、求められるもの～	
2	4月23日（木）13:00～16:10	ビジネス塾参加　私の狙い（ワークショップ）	
3	5月21日（木）13:00～16:10	食と農のビジネス 実践者は今サポーターとの意見交換	
4	5月28日（木）13:00～16:10	農業の経営戦略	
5	6月4日（木）13:00～16:10	マーケティング	
6	6月11日（木）、12日（金）	農場（企業）実習【視察研修】	
7	6月18日（木）13:00～16:10	インターネットを活用した販売とSNS活用術	
8	6月25日（木）13:00～16:10	フードシステム サポーターとの意見交換	
9	6月29日（月）13:30～16:40（一般公開講座）	食料・農業・農村の動向と施策	
10	7月9日（木）13:00～14:30	「食産業王国やまがた」実現に向けた取組み・支援策	
	14:40～16:10	産業支援機関による支援策とその活用	
11	7月16日（木）13:00～16:10	ケースメソッド（食と農のビジネスケースの解説）サポーターとの意見交換	
12	7月22日（水）9:00～12:10	食と農のビジネス　取り組む農業経営者の今（視察研修）	
13	7月30日（木）13:30～16:40（一般公開講座）	農村自給圏―スマート・テロワールーを目指して	
14	8月6日（木）13:00～16:10	食品加工場開設の実際	
15	8月27日（木）13:00～16:10	食品加工と衛生管理―基礎―	
16	9月3日（木）13:00～16:10	財務管理の必要性と複式簿記会員との意見交換	
17	9月10日（木）12:00～17:30	食品加工と衛生管理―実践―【視察研修】	
18	9月17日（木）13:30～16:40（一般公開講座）	フード・コミュニケーション・プロジェクト	
19	9月24日（木）13:00～16:10	販売力強化講座（1）	
20	10月1日（木）13:00～16:10	販売力強化講座（2）	
21	10月8日（木）13:00～16:10	販売力強化講座（3）	
22	10月17日（土）、18日（日）	販売実習Ⅰ（域内）	
23	10月22日（木）13:00～16:10	販売力強化講座（4）サポーターとの意見交換	
24	10月29日（木）10:30～12:00	物質・エネルギー利用型地域資源利用論	
	13:00～16:10	財務管理 ―基礎―	
OP	10月31日（土）、11月2日（日）	販売実習Ⅱ－1（域外）※	
25	11月5日（木）10:30～12:00	農産物の保存	
	13:00～16:10	財務管理 ―実践―	
26	11月12日（木）10:30～12:00	畜産の実態	
	13:00～16:10	経営設計―作物組合、労働配分―会員との意見交換	
27	11月19日（木）9:20～12:30	販売力強化講座（5）	
	13:30～16:40	ビジネス計画書作成（1）	
28	11月26日（木）13:30～16:40（一般公開講座）	庄内の在来作物	
29	12月3日（木）10:30～12:00	野菜の栽培管理	
	13:00～16:10	ビジネス計画書作成（2）	
OP	12月10日（木）、11日（金）	販売実習Ⅱ－2（域外）※	
30	12月17日（木）10:30～12:00	財務会計、資金計画の作り方	
	13:00～16:10	ビジネス計画書作成（3）	
31	12月25日（金）9:00～16:10	ビジネス計画書中間発表会（意見交換会）	
32	1月7日（木）11:00～11:30	ホスピタリティ・マネジメント事前学習	
	11:30～15:00	ホスピタリティ・マネジメントの実際【視察研修】	
	15:10～16:40	ホスピタリティ・マネジメントの検証	
33	1月14日（木）10:30～12:00	果樹の栽培管理	
	13:00～16:10	食と農のブランディング	
34	1月21日（木）13:30～16:40（一般公開講座）	やまがた食と農のビジネスの戦略的販路開拓（仮題）	
35	1月28日（木）10:30～12:00	稲作の栽培管理	
	13:00～16:10	ビジネス計画書作成（4）	
36	2月12日（金）10:30～12:00	農地情報と市町村支援策	
	13:00～16:10	ビジネス計画書作成（5）	
37	2月22日（月）9:00～16:10	ビジネス計画書発表会	
38	3月5日（金）13:00～14:30	ビジネス計画書優秀者報告会	
	15:00～16:00	修了式	

表2　ビジネス計画書のタイトル例

第一弾　鶴岡産リーフレタスを周年安定生産販売	自社既存商品のギフト化、販売に向けて	だだちゃ豆ポット苗
自家栽培の農産物を利用した農家カフェ・レストラン	キッチン・スペース事業（民泊との隣接）	産直運営会社設立
家業の安定した継承と、米価下落への対応	RN工房将来3年間収支計画	あっと驚く畑を作ろう
山形のおいしい農産物を海外へ Air産直	ミニトマト専業農家になる	山のビジネスプラン
レッセフェール　市（いち）の開催～食と農の楽しさを求めて	農業発展のための支援事業会社の設立	野菜の生産・販売
親子で農業体験できる有機（無農薬・無化学肥料）栽培農家	事業拡大と他生産者との差別化品目	農業サポートビジネス
本物の手すき和紙を初めて作るコース提供事業	野菜生産法人を2021年に設立	農場経営計画
ハンドメイド用植物の栽培、有効活用した商品づくり	地域特産物を活用し地域活性化へ	農産物のネット販売
露地ネギ／雪中軟白ネギ／アスパラガスの生産及び販売	庄内アンテナショップ　んだの！	イチゴの生産、販売
もっと新規就農者を増やしたい！―転職しやすい農業―	庄内柿・干し柿・茶葉	鶴岡"山のんめもの"屋
インターネットさくらんぼ注文フォームの設置事業 CSA（地域支援型農業）による新たな農業経営	水稲栽培の大規模化と法人化	グローカルな農家民宿
（株）ラッシュライフ事業概要 ～レタス輸出入Project～	庄内地方でのタマネギ栽培	規模拡大に向けた計画
農業、畜産分野への　ロボット、AI（人工知能）データ連携システム活用プラットフォーム展開事業		にこにこ日向応援隊

■農学部学生向け鶴岡の産業紹介講座

企業に訪問しての視察研修と企業が農学部に来て頂いての事業紹介という2つの事業を行っています。2019年度は視察研修として4つの企業に協力を得て2年生119名が参加しました。また紹介講座は「地域から学ぶ」の一部として100名ほどの学生が数社のプレゼンを聞きました。

■青年就農サポーターズクラブ研修

サポーター側のスキルアップのため、2016年度はコーチングの講座を開きました。学ぶだけではサポートのスキルアップにはあまり繋がらないようだったので、現在は食と農のビジネス塾の中で塾生との意見交換を行い、販売実習、ビジネス計画書作成、発表、そして暑気払い、忘年会、修了祝賀会に関わってもらうことで、今の支援を希望する人たちの意識や状況を把握し、サポートにいかして頂いています。

■よろず相談

「何でも相談にのりますよ」と呼びかけても、初年度はほとんど相談がありませんでした。しかし、2年目には前年の食と農のビジネス塾受講生を中心に175件203人の相談・訪問があり、その後199件247人、226件263人と多くの相談・訪問者があります。事務局の2人は事業全般の運営を担いつつ、訪問者はいつでもウエルカム。すかさずコーヒーを出し、時には姉妹のように、時には娘のように親身に対応しています。これが相談・訪問者の増加になっているようです。一見ムダな会話のようでもそこからは色々なサポート、連携が生まれています。「作物の生育が悪いんだよね。」と言葉には「サポーターに相談お願いしようか」と声がけ、「これ詳しい人に見てもらおうか」と声がけを行っています。

■メーリングリストによる情報発信

農林水産省、県、市町村などはメールマガジンを発信しています。それぞれ登録者が異なり、人によって情報の把握に差が出ています。これらの情報とコンソーシアムで入手した情報を食と農のビジネス塾受講経験者、コンソーシアム会員など約140名に月平均約20回の情報発信を行っています。

事業の自慢と今後の展開

この事業は大学がプラットフォームとなり事務局を持って関係機関と連携しながら農業人材の育成に取り組むという他にはない取り組みです。食と農のビジネス塾のこれまでの塾生は今でも相談に来ますし、販売実習では経験者として自ら販売に取り組み、現在の受講生のサポートをします。また「食と農のビジネス 取り組む農業経営者の今」では研修先となり、「食と農のビジネス 実践者は今」には毎年10名ほどが参加し、自らの経験を語ってくれます。この事業との関わりの発端はほとんどが食と農のビジネス塾ですが、彼らから広がり、今まで関わりのなかった農業者も相談に来るようになりつつあります。受講生を中心に表5のような色々な成果が出てきています。

一方、各種事業への学生の参加が少ないという課題もありました。地域との連携を深める農学部は昨年の鶴窓会だよりで紹介されたようにプログラム制を導入し、地域創生プログラムの選択必修科目として「食と農のビジネス論」を開講することとし、3，4年生で受講できるようにしました。この科目は本事業の食と農のビジネス塾そのものです。これによって、図5にしめす学生教育と社会人教育の連携が出来ると考えます。

最後に、本事業は補助金、負担金、会員の会費で運営し、またサポーターも有志のご協力に支えられています。事業を継続するには、多くの方に会員となって頂き、またサポーターになって頂くことは不可欠です。同窓会会員の皆さまからの積極的な参画を期待します。

図5　学生教育と社会人教育の連携

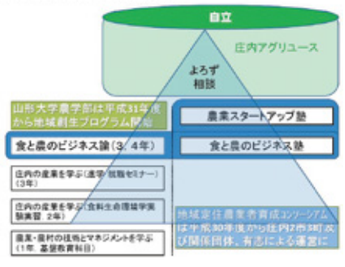

表3　受講生達のこれまでの成果

温海かぶ・こかぶちゃんの商品化、庄内一のこんにゃく栽培、農産物加工、有機栽培米の生産・販売、ゲストハウス経営、こだわり農産物のカタログショップ商品化、工芸品づくり、黒川山椒商品化（和紙とのコラボ）、*the* YAMAGATA BEANS、ワーキング・キッチン花蓮Karen、有機野菜の産直展開、（株）ラッシュライフ（農産物貿易）、養蜂業、長谷川和紙工房、野菜生産法人を目指して、庄内柿・干し柿・茶葉、夫婦で鶴岡"山のんめもの"屋、にこにこ日向応援隊、数人の仲間によるトマト・タマネギ・キャベツ栽培への挑戦、生産物と加工品のコラボなど異業種間連携、農作業・苗の提供などによる非常時の助け合い

農学部長就任のご挨拶

農学部長
村山 秀樹

この4月に新しく学部長になりました村山秀樹です。1990年2月に、農学部園芸学科の青果保蔵学研究室の助手として赴任しましたので、丸30年経ったことになります。また当時、青果保蔵学研究室のあったところが、今の学部長室で、30年前に戻った気分です。

学部長になって、農学部の「強みを知り、その強みを伸ばす」ことを第一に考えています。これは、もともとラグビー前日本代表監督エディー・ジョーンズが言った言葉です。組織を強くするにはとても重要なことだと思います。大学は、法人化されてから、6年間の中期目標期間における業務実績の評価をはじめ、様々な評価を受けなければいけません。その評価ですが、減点法が多いように思います。目標を立て、それに到達できなかったら、減点するような感じです。悪いことばかり指摘されていても、面白くありません。目標を達成できない点を改善するのも大事ですが、優れている点を評価し、そこを伸ばすことも忘れてはいけません。これは、大学だけではなく、子育てにもあてはまると思っています。

それでは、農学部の強みは何でしょうか。その1つは国際交流です。令和元年度は、アジア、アフリカを中心に15ヵ国から、実に118名の留学生が本学部で勉強しました。これは、学生総数の16%にあたります。現在の農学部は、国際感覚を身につけるには、うってつけの環境といえます。世界は、ますますグローバル化が進んでいます。新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、グローバル化あるいはボーダレス化がもたらした結果ともいえます。今年は、コース再編後に入学した学生が初めて鶴岡キャンパスに移行してきました。3年次には、国際展開プログラムを選ぶことができます。このプログラムを、基盤プログラムや地域のリーダーを目指す地域創生プログラムとともに充実し、農学部の強みをさらに伸ばしたいと思っています。

研究面では、「食料自給圏」スマート・テロワール」形成講座」と「アジアの水・食・健康リスク講座」の2つの寄附講座や「食の学際的研究拠点プロジェクト」等を通して、農学部の大きな目玉をつくるのが目標です。さらに、これらの研究を通して、学部を跨いだ研究を展開できればと思っています。山形大学は、東北では学部数、学生数が2番目に多い総合大学です。学部間の壁が低いのも山形大学の特徴です。農学部が総合大学を生かした教育研究の中心として、地域変革のエンジンとして、キラリと光る存在感のある大学を目指す山形大学の一翼を担えるよう、教職員一同頑張っていきます。

自然との調和を図る優れた技術!

業務内容
道路・橋梁・各種構造物調査設計／農業土木調査設計／農業集落排水／測量調査・地質解析／上下水道調査設計／河川・砂防調査設計／港湾・漁港・海岸調査設計／都市開発計画／環境アセスメント／施工管理／構造物維持管理（橋梁定量的診断ほか）

株式会社 帝国設計事務所
認証 ISO 9001

代表取締役会長 菅原 義昭（昭和40年 農工卒・技術士）
代表取締役社長 磯部 勝彦（昭和52年 農工卒・技術士）
技術顧問 足立 一郎（昭和58年 農工卒）

〒065-0025 札幌市東区北25条東12丁目1番12号 帝国ビル
TEL 011-753-4768 FAX 011-753-0488 URL http://www.kk-teikoku.jp

退職に寄せて

「退職に寄せて」

アグリサイエンスコース
（旧安全農産物生産学コース）
教 授 **西澤 隆**

私が東京にある前任の大学から助教授として山形大学農学部に赴任したのは、平成4年5月のことでした。たまたま家内は山形県出身だったため、何度か山形は訪れたことがあったのですが、実際に赴任が決まるまで山形大学農学部が何処にあるのかも知りませんでした。山形大学農学部に赴任することが決まって暫く経ったとき、当時野菜園芸学研究室の教授であった高樹英明先生が東京までご挨拶に来られましたが、その際「今日は新潟回りで来ました」と仰っていたので、「新潟大学に何か用事でもあったのかな?」と疑問に思ったのを覚えています。鶴岡駅前は当時も余り人通りは多くなく、小雨の降る中家内と初めて降り立ったまたま見つけた食堂に入り、「親子丼」を注文したところ、「豚肉しかないので、豚と卵で作ったから」と言われて、二人で「…?」となったのが、今では懐かしく思い出されます。

そんな鶴岡も気がつけば私の生涯で最も長く生活した地となり、少なくとも生活のベースはすっかり庄内人らしくなりましたが、言葉は相変わらず「標準語」のままです。農学部への赴任が決まった際に、家内が「庄内は言葉が違うから…」と不安そうな表情だった意味が今では良く理解出来ますが、最初は「この人は何を言っているのだろう?」と不思議に思ったものです。

ともあれ、山あり、海あり、川ありの庄内は自然の宝庫で、しかも食材の宝庫です。四季を通じてアウトドアの生活を楽しむことが出来ますし、温泉でのんびりすることも出来る素晴らしい場所だと思います。この地に山形大学農学部があり、野菜園芸学の研究を続けることが出来たことは、私の人生にとっても非常に有意義なものだったと思います。3月で教職は離れますが、暫くは庄内の自然を満喫する生活を続けるつもりでいます。残された皆様の今後の益々のご活躍を祈念して、私の退職の挨拶とさせて頂きます。長い間、ご指導・ご鞭撻頂き、有難うございました。

「アフターコロナ」の時代に

エコサイエンスコース
（旧水土環境科学コース）
教 授 **安中 武幸**

私が農学部に着任したのは1998年4月である。前任地は農業工学研究所であり、大学には「新天地」を期待しての着任であった。しかし、「大学」は、学生としての関わりで形成された私のイメージとは異なる「場」であった。「教員」と「学生」という立場の違いはあるが、それ以上に、「大学改革」の進行が大きな要因だったと思う。それから23年、「大学改革」は加速の一途をたどった。国立大学は法人化され、教授会の形骸化など運営のトップダウンが強化された。大学は経済成長戦略の有力な「手段」に位置付けられ、大学政策は経済政策となった。組織にも個人にも社会・経済に役に立つことのみが求められ、グローバル人材など「有用な人材」の育成が強調されている。「広く教養を身につけ人格形成を図る場」としての大学はどこかに行ってしまった。退職を前にして、この「違和感」がますます強くなっている。

2010年4月の学科改組の際、「地球環境論」という科目を立ち上げた。その問題意識は、「持続可能性に関わる様々な問題に対して見解の対立が目立つのみならず、解決策間に矛盾が見られる。科学・技術の進歩は著しいが専門分化した諸科学に「諸問題」解決は可能なのか。私達には『全体的かつ歴史的な視点』を持つこと、ものごとをシステムとして捉える視点が求められているのではないか」ということであった。開講直前（2011年3月）に東日本大震災が発生し、最後の年（2020年）には新型コロナウイルスと遭遇した。本科目は、この様な「現在進行中の歴史的事態」を「持続可能性」と関連付けながら受講学生とともに考えることのできる貴重な機会となった。

世の中の急速な変化に取り残されていく感を抱くこの頃ではあるが、私はいま、「時代おくれ」という曲（1986年、河島英五）がとても気に入っている。

「・／あれこれ仕事もあるくせに／自分のことは後にする／ねたまぬようにあせらぬように／飾った世界に流されず／・／時代おくれの男になりたい」

現役大学教員がこの様な「境地」ではお叱りを受けるかもしれない。しかし、退職後は気兼ねなくこの様な人生を追い求められれば…と思っている。そしてそれは、「アフターコロナ」の時代がこれまでの経済成長一辺倒から脱却し人類の歴史的課題に立ち向かう時代となることを願う気持ちでもある。

「12年間を振り返って」

エコサイエンスコース
（旧水土環境科学コース）
教 授 **奥山 武彦**

平成21年4月に農学部教員に加えていただいて、その時からわかってはいたものの12年間が経ち、人生2度目の退職は〝定年〟がつくことになりました。日々の時間が過ぎるのが早いと感じるのは、年齢が上がったからだけで